



小島烏水全集

第十一卷

大修館書店

小島烏水全集 第十一卷 (第九回配本)

定價八八〇〇圓

昭和五十七年二月十日印刷

昭和五十七年二月二十日發行

著者 小島烏水

發行者 鈴木敏夫

印刷者 青木勇

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三十二四

電話〇三(二九四)三三二一(代表)

千一〇一振替(東京)九一四〇五〇四

第十一卷 目次

偃松の匂ひ

序

《偃松衣》

偃松の匂ひ

飛驒笠ヶ岳の早期登山者圓空・南裔・播隆

飛驒山脈早期探検者坂市太郎とライマン翁

地質學者ナウマンと森鷗外の論争

ウエストン翁の敍勳と浮彫像建立に就いての話

『日本山嶽志』を書いた高頭さん

ヒマラヤ聖戰行のために

富士山の雲の畫家

すたれ行く富士の古道

去つて行く人々

《山岳圖書室》

谷文晁の『日本名山圖會』

ラスキンと徳富兄弟

冠松次郎氏の「山」の近業

山岳圖書おぼえ帳

《遠近人間記》
ちよこちびとのき

椿の女

山縣悌三郎先生（「少年園」と「文庫」）

千葉龜雄

筑波根詩人

老行脚江見水蔭

《抗議二篇》

富士山ケーブルカー反對

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

内田實氏の『廣重』に對する抗議

《講演》

亞米利加の山岳風景舌描

石を移す記

相見ぬ魯庵氏

「文庫」三詩人の思ひ出

現代装釘美術展覽會を見て

菊五郎と默阿彌物

石を移す記

「女性時代」の三週年

淺草の觀音さま

山中湖より

人間夜雨

一七

一八〇

二〇三

二〇五

二〇七

二〇八

二二三

二二五

二二七

二三三

二三四

夜雨の『夕月』

二三

千葉君の手紙其他

二三

齋藤昌三氏へ

二三

明治藝術傳——相馬氏の『默移』

二四〇

『廣瀬川の畔』に引かれて

二四二

「女性時代」第百號

二四七

未知の不喚洞君

二四九

雅號の由來

二五〇

「書物展覧」百號感

二五一

阿佐ヶ谷の神明宮

二五五

日本の山岳

登山者の註文帳

二六三

常念岳の發見

二六五

山の面貌	二七〇
藝術的な登山	二七三
雪の山の人々	二七四
書齋における山水	二七七
日本の山岳	二八一
故山崎博士蒐集古地圖及錦繪展覽會	二八四
『ハイランド』解題	二八七
登山の草分時代	二九三
飛驒笠ヶ岳	二九六
薬師岳のカール	三〇二
槍ヶ岳登山以前	三〇三
山岳會の仕事は創作に在る	三〇三
第一登山	三〇六
夏の山	三〇六
上條嘉門次	三〇三

日本アルプス 國立公園の名稱に就きて	三六
故辻村伊助と『善光寺道名所圖會』	三四三
山梨縣對靜岡縣小富士及富士山頂爭奪戰諍論	三四五
『山岳圖書展覽會目錄』解題	三四八
早期登山の回想	三五九
私の初めて登つた山	三六四
富士山にケーブルカー架設の可否	三六五
「日本山岳會三十年」補註	三六六
『日本風景論』解説	三七〇
岩波版『日本風景論』に就いて	三八三
ウエストン翁に與ふる書	三八七
山のウエストン翁	三九五
日本アルプスの開拓者	三九七
日本山岳會事務所よりの懷古	四〇〇
ウイムバアの刻んだ日本風景に就いて	四〇四

四十餘年前の多摩川上流の旅

四〇七

田中阿歌麿先生古稀祝賀

四二一

山の本の藏書票及び手署等

四二五

アルプス銀座が未だ登られなかつた頃

四三二

もつと山へ働きかけよ

四三四

山の署名本から見た故人・今人

四三七

神河内地名考

四三九

故人河野齡藏氏を語る

四四五

鳥居峠と雲雀の句

四七四

『大下藤次郎遺作賣立展目錄』序

四七六

『日本南アルプス』序

四八〇

『山岳』第二十五年卷頭言

四八四

『アルプス處女峰登攀史』序

四八五

『ヒマラヤの旅』に寄す

四八九

『高山深谷』第九輯 序

四九〇

『甲斐のやま山』序

四九二

『黒部奥山と奥山廻り役』序

四九三

The Forward of "Scrambles in Japan and Formosa"

四九六

山岳圖書批評

『槍ヶ嶽の美觀』(丸山文臺・高島畔園・野本紫竹合著)

五〇一

『新測富士見十三州圖』(淺岡 誠作)

五〇二

新高山繪はがき

五〇三

『高山植物叢書』第二卷 (前田曙山著)

五〇四

『や ま』(志村烏嶺・前田曙山共著)

五一

『富岳志』(靜觀道人著)

五一八

『日本風景新論』(伊藤銀月著)

五二〇

『遠野物語』(柳田國男著)

五二七

『南極と北極』(小林房太郎著)

五二九

『富士植物帶論』(早田文藏著)	五三
『水彩寫生旅行』(大下藤次郎著)	五三七
The Alps (by W. Martin Conway)	五三九
Climbing on the Himalaya and other Mountain Ranges (by J. Norman Collie)	五四一
The Alps and Pyrenees (by Victor Hugo)	五四三
A Guide to Zermatt and Matterhorn/A Guide to Chamonix and the Range of Mont Blanc (by Edward Whymper)	五四六
『山 研究と隨想』(大島亮吉著)	五四〇
『山と雪の日記』(板倉勝宣遺稿)	五四四
『黒 部』(冠松次郎著)	五五八
『峠』(深田久彌編)	五六〇

偃松の匂ひ

序

寂しい高根の上、偃松の中に寝轉んで、ピツケルを一本、頭上に立てゝゐるかまきりをとて蟬螂男がある。彼はその頃、日本では殆ど見られなかつたピツケルの、瑞西輸入品を分けてもらつて、それを手に山の町々をこれ見よがしに漫步したり、地平線上に高聳する山々谷々を起きつ轉びつ、駈けめぐることが得意にしてゐた。爾來幾十星霜、笑止なるかな、ピツケルは手入れをしないので、いつしか錆びてしまひ、不格好にして幼稚なる自製登山服は、疾くにカビ臭くなつて蟲干にすら遠慮しなければならなくなつた。だが、その衣に刻印された植物性の青い擦痕は、パレットに沁み込んだ古彩色の如く、いつまでも抜けさうにない、それには感覺的に偃松の脂くさい匂ひがある。蟬螂男は、外國に於て、氷河の無い山を愛せず、日本内地に於て、偃松の茂つてゐない山を好まない（尤も聖なる富士は別だが）。贅澤なる哉、偃松衣、懐かしきかな、偃松の匂ひ、蟬螂男の餘命は、段々短くなりさうだが、偃松へのあこがれは、忘じ難き青春の如く、益す永とこしへになつて行く。

本書に收録したのは、主として偃松の匂ひの筆端に放散する（もしくはさう有りたいことを希望する）本

邦早期登山の物語と、偃松衣を著た故人今人内人外人の集ひ話である。「日本アルプス探検時代」の一部分と、見倣してもよし、昨年の拙著『アルピニストの手記』の續篇と見てもいい。山の本としては、過去に於ける山岳道の終曲を奏するものであるかも知れないが、螳螂男の跳躍が、そこにあつたとすれば、その邊で螳螂の斧を振つてゐる姿を、自ら憐れみ且つ善しとする。

岐蘇人の懷つかしきかな秋の夕

昭和十二年九月

六十五叟 烏水迂人

《偃松衣》

偃松の匂ひ

あの頃、山へ登るといふことは、絶頂に立つことであつた。今でも、ヒマラヤへ登る人は、さうであらうが、日本アルプスに於ても、山名も、所在も、標高も、判然と知られてゐなかつた時分だから、登山は、未だ見ぬ世界への闖入である。今のやうに岩壁登攀の好適地とか、氷河の遺跡などを搜したり、未発見の動植物を採集するといふやうなことは、第二義的の仕事としてあまり顧みられなかつた。

山の絶頂へ登りつくすれば、どんな山々が重疊して、眼前に展開するだらう、新しい高原や、湖水を發見するとも限らないであらう、と空想するだけでも、嬉しさでゾクゾクする。一にも絶頂、二にも山巔であつた。

日本の高山の裾には、大抵溪谷が流れてゐる、森々たる喬木帯を抜けやうとして、登つても、登つても、溪聲が、裾の方から追つかけて来る。これが耳に喧しい間は、絶頂は未だ容易でない。參謀本部實測地圖の